

市内の小学校10校に4月、計115人の新1年生が入学しました。令和5年度の「しおさい留学」の留学生（榕城、下西を除く）は29人。そのうちの3人（内訳は伊関1人、古田2人）が新1年生です。

古田小学校（田原英樹校長、児童15人）では、留学生2人と、保護者転勤による1人を加えた新入生3人を迎え、2年ぶりに入学式がありました。会場の体育館にはたくさんの花が飾られ、在校生や教職員、保護者、地域住民代表の人らの笑顔と拍手で祝福しました。

在校生を代表し3年生の川口夕麗晏（ゆりあ）さんが「学校は、給食がおいしいです。お兄さん、お姉さんもやさしいよ」と歓迎の言葉をかけていました。

校庭わきには古田御前（1548〜89）と幼いころの16代島主種子島久時（1568〜1612）の母子像が立っています。同校はその屋敷跡であり、「賢母遺蹟碑」には、久時の父、14代島主時堯が国上村で狩をしたとき、地元の人家で渴いたのどをうるおしたとする故事が記されています。家の娘が茶碗を鍋のふたに載せて、最初はかすかに熱く、次になや熱く、次になり熱いお茶を差し出したそうです。この氣遣いに感銘を受けた時堯は、娘を側室にしました。

このころの九州一円の情勢は、島津氏が薩摩、大隅、日向の三州を統一し、九州制覇をうかがっていました。南海の雄とされた種子島氏の島主時堯は、世継ぎの15代時次が幼くして死去し、後継に心を悩ませていました。古田御前は、久時を養育する地として、島では厳寒で知られる古田を選び、後に「武の久時」と称されるまでに育て上げたといわれます。

令和の子どもたちも母子像に見守られ、元気に育つことでしょう。



新1年生を囲み記念撮影＝古田小学校で